

(第二時限：八〇分)

二〇一四年度 ① 国語問題

題

(全19ページ)

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 二、解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい。
- 三、解答に字数制限がある場合には、句読点・カッコも一マスとすること。

例

で	あ	る	。	し	か	し	、	「	そ	れ	は	」
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- 四、受験学部・受験方式によって解答すべき問題を指定しているので注意すること。

(注) 受験学部を受験票で十分に確認すること。

全学統一方式(文系)

受験学部	解答する問題
法学部	一、二、三
産業社会学部	
国際関係学部	
政策科学部	
映像学部	
経済学部	
経営学部	
スポーツ健康科学部	一、二、三または 一、三、四
文学部	※二(現代文)と四(漢文)は選択問題です。 (万一、両方とも解答した場合は高得点の方を採用します。)

A方式

受験学部	解答する問題
アジア太平洋学部	一、二
国際経営学部	

- 五、マークセンス方式の解答欄は解答用紙の左側にあります。
- 六、マークに際しては、マークした部分を機械が直接読み取って採点するので、左記の注意事項を読み、間違いないようにしなさい。

<p>1、マークする時は、HBの黒鉛筆(シャープペンシルはHBの0.5ミリ以上の芯)を使用すること。</p> <p>2、解答用紙は折り曲げたり、汚したりしないよう注意すること。</p> <p>3、だ円は次のように完全に黒くぬりつぶすこと。 (ぬりつぶしがうすい場合は、解答が正しく読み取れないことがあります。)</p> <p>(1) 解答がひとつの場合(例えば③と解答したい場合)</p> <p style="text-align: center;">① ○ ② ● ③ ● ④ ○ ⑤ ○</p> <p>(2) 解答がふたつの場合(例えば③と⑤と解答したい場合)</p> <p style="text-align: center;">① ○ ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ○</p>	<p>4、マークする場合の悪い例(次のようなマークは正解と判定されません。)</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td>① ○</td> <td>② ○</td> <td>③ ○</td> <td>④ ○</td> <td>⑤ ○</td> </tr> <tr> <td>① ○</td> <td>② ○</td> <td>③ ○</td> <td>④ ○</td> <td>⑤ ○</td> </tr> <tr> <td>① ○</td> <td>② ○</td> <td>③ ○</td> <td>④ ○</td> <td>⑤ ○</td> </tr> <tr> <td>① ○</td> <td>② ○</td> <td>③ ○</td> <td>④ ○</td> <td>⑤ ○</td> </tr> </table> <p>○で囲む ✓印をつける 線を引く ぬりつぶしが不完全</p>	① ○	② ○	③ ○	④ ○	⑤ ○	① ○	② ○	③ ○	④ ○	⑤ ○	① ○	② ○	③ ○	④ ○	⑤ ○	① ○	② ○	③ ○	④ ○	⑤ ○
① ○	② ○	③ ○	④ ○	⑤ ○																	
① ○	② ○	③ ○	④ ○	⑤ ○																	
① ○	② ○	③ ○	④ ○	⑤ ○																	
① ○	② ○	③ ○	④ ○	⑤ ○																	
<p>5、一度マークした解答を訂正する場合は、消しゴムで完全に消してからマークし直すこと。</p> <p style="text-align: center;">① ○ ② ○ ③ ○ ④ ○ ⑤ ○</p> <p style="text-align: center;"> ● </p> <p>×印をつけても消したことになります。</p>																					

七、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

一 次の文章を読んで、問いに答えよ。

多くの人が実感していると思うのだが、小説や、あるいはもっと広く散文で書かれた書物一般を含め、読書というものは読み進めるにつれてスピードがあがっていくものではないだろうか。最初の十頁、中盤の十頁、最後の十頁と、読むのにかかる時間が短くなっていく。(1)これはおそらく、文章の前提となるものを、読み進めるに従って読者が取り入れ蓄積していくからである。(2)出だしでは、描かれている世界の設定なり常識なりをゼロ地点から構築する必要があるのだが、次第にその必要がなくなり、情報量が一定であっても、あるいは増えても、吸収の効率はぐっとよくなる。(3)あるいはこの吸収速度の高まりが、「おもしろさ」として感じられ読書の快楽が幻想されるといふこともあるかもしれない。

ところがどうも志賀直哉の文章というのは、効率性の高まりということがあまり起きないのではないかと思うのである。読み進めてもスピードがあがらない。これは証明するのが難しい感覚にすぎないのだが、ひとつの提案ができそうだ。

賀直哉の文章では「蓄積」があまり起きないのではないかとこのことである。(4)ある文章の読み方をめぐる文法がノウハウとして蓄積され、読者がその文法に慣れれば慣れるほど読みの勢いも増してくる。(5)ところが、志賀の場合、この蓄積をさまたげる何かがある。

例として「城の崎にて」を見てみよう。電車にはね飛ばされて九死に一生を得た語り手が、リョウヨウのために城崎温泉を訪れるという話である。著者によれば「事実ありのままの小説」とのこと、そこに描かれるねずみや、蜂や、イモリの死などが、生と死の境界について敏感になった語り手の目を通して語られる。原稿用紙二十枚程度のごく短い作品である。

クライマックスとなるのは、イモリの死なのだが、その前に川で溺れ死ぬねずみの様子が描写される。

ある所まで来ると橋だの岸だのに人が立つて何か川の中の物を見ながら騒いでゐた。それは大きな鼠を川へなげ込んだのを見てゐるのだ。鼠は一生懸命に泳いで逃げようとする。鼠には首の所に七寸ばかりの魚串が刺し貫いてあつた。頭の上に三寸程、咽喉の下に三寸程それが出てゐる。鼠は石垣へ這上らうとする。子供が二三人、四十位の車夫が一人、それへ石を投げる。却々当たらない。カチツカチツと石垣に当つて跳ね返つた。見物人は大声で笑つた。鼠は石垣の間に漸く前足をか

けた。しかし這入らうとすると魚串が直ぐにつかへた。そして又水へ落ちる。

短い文が連なり、切迫感を醸し出している。緊張感もある。余計な修飾語や感情表現の挿入が少なく、著者が言うところの「事実ありのまま」という気分も伝える。飾り気のない、裸で剥き出しの感じがある。

しかし、この切迫感や剥き出しさが読書のスピードにはつながらない。というのも、ここでは短い文の連続が雪崩を打って前へ前へと殺到する感じを生み出すことがないからである。ひとつひとつの文はあくまで等価というのか、お互い釣り合い、また独立しているように見える。

⑨ 前のめりの勢いを出すための一番単純な仕掛けは、文を少しずつ長くしていくという方法である。たとえば高村光太郎は、列挙の中からそういう勢いを作り出していくのがたいへんうまい。「ぼろぼろな駝鳥」という詩を見てみよう。

何が面白くて駝鳥を飼ふのだ。

動物園の四坪半のぬかるみの中では、

脚が大股過ぎるぢやないか。

頸があんまり長過ぎるぢやないか。

雪の降る国にこれでは羽がぼろぼろ過ぎるぢやないか。

三行目から五行目にかけて「過ぎるぢやないか」の語尾の繰り返しとともに文が長くなる中で「勢いの増大」が演出され、感情の蓄積とともに叙情的な高揚が感じられる。

これに対し「城の崎にて」などでは、このような切迫した場面であっても、どちらかというところへ「長→短」という動きの方が目立つような気がする。文章のところどころで先行する文よりも短い文が挿入されることで、スピードが殺される。事態が切迫し、緊張感が増しているのに、アクセルを入れたと思っただけでブレーキが踏まれるような感じである。いちいちぐつ、ぐつ、と抑止の力が働き、勢いがなかなか蓄積されない。

もちろん、私たちが志賀の文章を読んでいるときに「あ、長から短になった」などと思うわけではない。

B

、何となく

勢いが増しそうなときに限って、それが抑制されるような、独特のスピード感覚がある。志賀が「精神のリズム」と呼ぶものと通ずる何かである。「リズム」と題された短い随想から引用してみよう。

マンネリズムが何故悪いか。本来ならば何度も同じ事を繰返してあれば段々「うまく」なるから、いいはずだが、悪いのは一方「うまく」なると同時にリズムが弱るからだ。精神のリズムが無くなつてしまふからだ。「うまい」が「つまらない」と云ふ芸術品は皆それである。幾ら「うまく」ても作者のリズムが響いて来ないからである。

「精神のリズム」などという言い方の「立派さ」に辟易する人もいるかもしれないが、これは単なる理念ではなく、しごく具體的な文章作法でもあると思う。「うまさ」に溺れずあくまで「リズム」を保つとは、志賀にとっては、勢いを増しつつも勢いを蓄積しないような文章との付き合い方のことを意味していたのではないだろうか。

別の言い方をすると、それは文があくまで文として独立し、文章に取り込まれてしまわないということである。一般に文章の中で文が連なっていけばいくほど、それぞれの文は文章全体の中の一要素にすぎなくなってくる。文は文章に從属し、蓄積された勢いに巻きこまれる。しかし、志賀直哉の文章では、先の長短の使い方にも表れていたように、なかなか **C** が **D** に取り込まれない。あくまで **E** を **F** として語ろうとするような気構えのようなものがある。

これと関連させて考えるとおもしろいのは、志賀直哉における「しかし」の用法である。近代文学研究者の小林幸夫は「城の崎にて」の「しかし」の詳細な分析を行い、そこに「空白」があるのではないかと指摘する。というのも、なぜ語り手が「しかし」という逆接を使わなければならないのか、その論理関係がいまひとつ不明瞭だからである。読者はその「空白」を補う必要がある。さらに続けて小林は、ある非常におもしろい指摘をする。逆接の「しかし」の後に、**G** が述べられるというのである。そこで見えてくるのは、小林のいう次のようなことである。

「しかし」という接続詞は、「自分」の論理の中では、最終的な感情の帰結を導くための言葉なのであり、構文上の制度から離陸して、己の心的ありようを語るための決まり文句なのである。この、構文論理を越境し、「自分」のありようを語る機能を付加された「しかし」は、いわばキソンの文法体系から「自分」の文法体系の中に拉致されて、新たな呼吸を始めて

いる、と言える。

「構文論理を越境し、『自分』のありようを語る機能を付加された「しかし」とは、H 文章から独立しつつある「しかし」だと言い換えてもいいだろう。もちろん、事は「しかし」の問題にはとどまらない。「しかし」の使い方が典型的に示すのは、志賀直哉の語りにおける文と文章との間の緊張関係だと言える。作品としてひとつのまとまりをなすためには、文は当然文章の一部でなければならぬのだが、志賀の文は文章の統合作用に抵抗する。文章の流れの慣性から生まれる「勢い」に^①与せず、むしろ、それまでの蓄積を極力抑止しながら、まるでそれぞれの文が独立した新たな出発であるかのように、まるで新たに書き付けられた出だしであるかのように、語りが進むのである。

(阿部公彦「文学をへ凝視する」による。なお一部を改めた)

注 城崎温泉Ⅱ兵庫県北部にある温泉。

問1 傍線①、③のカタカナを漢字に改めよ。

問2 傍線②、④の読み方をひらがなで書け。

問3 次の一文は、本文中の(1)～(5)のどこに入れるのが最も適当か。その番号をマークせよ。

速度の増加は一種の慣性によるものだ。

問4 傍線⑦の「どうも」に最も近いと思われる意味のものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 いかにも
- 2 どうやら
- 3 まったく
- 4 何とも
- 5 もちろん

問5 A、 B、 H に入れるのに、最も適当と思われるものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- | | | | | | |
|---|--------|--------|--------|---------|----------|
| A | 1 逆に | 2 すなわち | 3 たとえば | 4 なぜなら | 5 したがって |
| B | 1 あるいは | 2 いっぽう | 3 さらに | 4 しかし | 5 つまり |
| H | 1 ただし | 2 そもそも | 3 つまりは | 4 少なくとも | 5 いずれにせよ |

問6 傍線④の「に」と同じ文法的性質のものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 次第にその必要がなくなり、
- 2 九死に一生を得た語り手が、
- 3 「過ぎるぢやないか」の語尾の繰り返しとともに文が長くなる中で
- 4 「うまく」なると同時にリズムが弱るからだ。
- 5 「しかし」の使い方が典型的に示すのは、
- 6 作品としてひとつのまとまりをなすためには、

問7 傍線⑤に「前のめりの勢いを出す」とあるが、それによって、読者はどのような印象を持つと述べられているか。本文中から二十五字以内でそのまま抜き出して、始めと終わりの五字を書け。

問8 C、 D、 E、 F の順に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- | | | | | | |
|---|-----------|---|------------|---|-----------|
| 1 | 文—文章—文—文章 | 2 | 文—文章—文章—文章 | 3 | 文—文章—文—文 |
| 4 | 文章—文—文—文 | 5 | 文章—文—文—文章 | 6 | 文章—文—文章—文 |

問9 G に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 勢い
- 2 静かさ
- 3 高まり
- 4 蓄積
- 5 わびしさ
- 6 不明瞭さ

問10 本文の内容に合致するものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

1 志賀直哉の語りは、それぞれの文を互いに独立したものととして語っていくところに特徴がある。そのため、文と文との間に緊張関係が生じ、文が文章の流れに巻き込まれることもない。

2 志賀直哉の文章には空白があるため、彼の文章を読み進めても読書のスピードがあがらない。これは、読者がマンネリズムに陥らないようにするという彼独特の文章作法によっている。

3 志賀直哉の文章は、修飾語や感情表現をできるかぎり少なくして、「事実ありのまま」という気分を伝えようとしている。そのため、物語が淡々と進み、読書のスピードがあがらない。

4 志賀直哉の文章作法は、短い文を連ねていくことにより、切迫感を醸し出すというものである。これは彼のいう「精神のリズム」に通じるもので、「城の崎にて」に端的に現れている。

5 志賀直哉は、文章に逆接の「しかし」を多用する傾向がある。彼の「しかし」には論理関係が不明瞭で理解しにくいという特徴があり、そのことによって読者は緊張を強いられている。

6 志賀直哉は文章を書く際に、ひとつひとつの文を書き出しであるかのように書き進めていく。そのようにして書かれた彼の文は、文章を組み立てる一部分となることにはあがっている。

問11 白樺派の作家を、次のなかから一人選び、その番号をマークせよ。

- 1 菊池寛 2 佐藤春夫 3 北原白秋 4 長与善郎 5 宮本百合子 6 山本有三

二 次の文章を読んで、問いに答えよ。

昔の人は意地が悪かったなあをつくづく思い出す時がある。石垣りんが、

春は明治 短い夏の大正

過ぎての後 昭和はすでに晩秋。〔挨拶状〕

と回顧する戦前の生まれの人は、いずれも意気地もあつたけれども、その裏側に意地の悪さの刺を潜ませていた。もちろん、今の世にも意地悪な人間はごまんといるのだが、何か意地の悪さの質が違う。今の世の人の意地悪は弱った身心から流れ出す膿うみのようなべとつきを持っている。昔の人の意地悪は、自分が絶対に正しいと言う思い込みから放たれる火矢だった。

これにはずいぶん悩まされた。なにしろ意地悪をする本人は自分を絶対に正しいと信じているのだから強い。天動説の強さだ。うっかりその火矢に当たるとしばらく痛んでしようがなかった。小学校を卒業してすぐに丸の内の銀行に勤め、戦争を挟んで、日本経済が高度成長期を過ぎてゆく様子を、

経済というものの持つみような生命力は

東京丸の内のビル街を

ぐんぐん高くして行った。〔挨拶状〕

と眺めていた石垣りんも、そうした意地悪の火矢にはずいぶん苦勞したことだろうと思う。

石垣りんの詩に現れるユーモアは、意地悪の火矢を避ける時の身のこなしがある。昔の人は意地の悪いこともずいぶんするけれども、それを皮肉で弾き返す機知も持っていた。だから人の話し方もけっこう皮肉っぱかったけれども、それがおもしろかつ

た。庶民の暖かな人情なんて言うけれども、庶民ほど皮肉っぱかったのである。庶民は、傷つくことも多いから、あらかじめ機知を蓄えて皮肉で応戦したものだ。^① そうした身心を守るための機知から発したセンスを、石垣りんは時代と戯れるための武器にしている。そこが意地悪に皮肉で応戦して泣き笑いを繰り返す人々と詩人の大いなる違いだ。時代と戯れるための武器を手に入れるために、詩人は意志の力を用いた。

D 出版社から再刊された石垣りんの四冊の詩集「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」「表札など」「略歴」「やさしい言葉」を改めて読んでみた。生涯に四冊の詩集しか **A** しなかった詩人の詩集が、この詩歌の低調を囁かれる時代に、生前再刊されて、しかも重版をかさねて読者を得て愛されているということは幾ら言祝いでも言祝ぎすぎることはないだろう。石垣りんと言えば、

様も

殿も

付いてはいけない、

自分の住む所には

自分の手で表札をかけるに限る。(「表札」)

がもつとも有名で、もつとも共感を集めた詩句だ。このすっきりとした自立の意志の表明は第一詩集の表題作である「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」の中に表明された意志の中から生まれてきている。

私たちの前にあるものは

鍋とお釜と、燃える火と

それらなつかしい器物の前で

お芋や、肉を料理するように

深い思いをこめて

政治や経済や文学も勉強しよう、

と歌われた中から現れてきたものだ。詩人は「私」とは歌っていない。「私たち」と代々を生きてきた女たちを代表している。

そして「燃える火」を見詰める視線は遠く水平線にまで伸びて、水平に結ばれた空と海との結びめにある謎を解こうとする。

水平線に隠された結びめを解いていのちの謎を解こうとするその手の動きが美しいのが「表札など」という詩集だ。次の詩集『略歴』で自分の生涯に挨拶を送った詩人、石垣りんの水平の視線は大空の彼方にまでも届くようになっていく。最後の詩集『やさしい言葉』にある詩で私たちは地球を背負って、太陽を提灯しやうちんにして大宇宙の軌道を歩いている。

太陽の光を提灯にして

私たち 太陽の光を 提灯にして

天の軌道を 渡ります。

おそろしいほど深い B です。

人間は 半交替で 眠ります。

一日背負っている 生きているいのちの重みは
もしかしたら 地球の重みかもわかりません。

やがて 子供たちが 背負うでしょう

海山美しい この星を。

ひとりひとり 太陽の光を 提灯にして

天の軌道を 渡るでしょう。

ここに至っても石垣りんは視線の方向を転じることはない。どこまでも、どこまでも水平線を突き破って視線を水平に伸ばして行くとそこに「おそろしいほど深い **B**」が存在したのである。この水平の視線を経験することこそ石垣りんの詩を読む読者としての喜びである。水平の視線を伸ばすことで地動説の内側へ入り込んでしまった詩人、それが石垣りんであろう。

(中沢けい「水平に結ばれる『いのち』」による。なお一部を改めた)

問1 **A** に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 刻印
- 2 上梓
- 3 推敲
- 4 校閲
- 5 改訂
- 6 謹呈

問2 傍線⑦に「石垣りんも、そうした意地悪の火矢にはずいぶん苦勞したことだろうと思う」とあるが、それは具体的にはどのような性質の「火矢」であったと筆者は考えているか。最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 仕事と詩作を両立させていたことへの羨望の火矢
- 2 家族や友人との葛藤があったことへの非難の火矢
- 3 感性と言語感覚に優れていたことへの嫉妬の火矢
- 4 学歴がないことと女であったことへの偏見の火矢
- 5 機知に乏しく皮肉屋であったことへの怨恨の火矢

問3 傍線⑧に「そうした身心を守るための機知から発したセンスを、石垣りんは時代と戯れるための武器にしている」とあるが、「時代と戯れる」には、石垣りんのどのような精神の在り方がこめられているか。最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 しなやかさ
- 2 おだやかさ
- 3 なめらかさ
- 4 ふくよかさ
- 5 おおらかさ
- 6 かるやかさ

問4

B に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 人間の灯
- 2 都会の夜
- 3 宇宙の間
- 4 文学の謎
- 5 生命の泉
- 6 海洋の底

問5 石垣りんという詩人への筆者の評価として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 世間の無知と闘って社会活動に身を捧げた詩人
- 2 生のありようを見すえて孤絶の内に生きた詩人
- 3 会社員としての生活の外に自分を見出した詩人
- 4 くらしを見つめて宇宙の真理にまで達した詩人
- 5 真つすぐに事の真相を見抜き矛盾を暴いた詩人

(このページは白紙)

三 次の文章を読んで、問いに答えよ。

(唐に渡つた氏忠は、ある夜、都から遠い所にある樓閣に迷い込み、翁から不思議なことを聞かされる。)

「我この国にとりて、琴をたづさはれること七十三年。この声によりて身に余る位をたまはり、はからざるに棠花をほどくす時ありき。またこの声によりて、横様なる愁へに会ひ、心に余る悲しびに臨めりき。つひに上柱国太子大傅河南尹を授けらる。年衰へ身きはまりて、立ち居もやすからず。病冒すによりて、つかさをたてまつり、身を休めてこの樓に月を見るに四年になりぬ。秋の月、春の花の時、ただこの琴の声によりて心を伸べ、残りの身をやしなふ。しかあれども、深くこの琴の心を知れること、いまの世にとりては、華陽公主と聞こゆる女公主には及びたてまつらず。君はかの公主の手より、この音をば伝ふべき人なり。かの公主は八月九月の月のころ、かならず商山といふところにもりて、琴の音をととのへたまふ。かれは、年はじめて二十、我に及ばぬこと六十三年。女の身なれど、前の世に琴を習ひて、しばしこの世に宿りたまへるゆゑに、おのづからさとりありて、その手を仙人より伝へたまへり。さらに都に帰りて、かならずかの山を尋ねたまへ。この手を伝へむとおほさば、ゆめゆめ乱れたる心をさめて、目のあたりいさぎよくして、この手を習ひたまへ。このこと、心より外にもらしたまふな。この国の習ひは、広きに似て狭し。緩べるに似て固し。まことに深きところを、あらぬ国の人に教ふることは、公ことにいさめたまへど、我、世を逃れて後、年を経たる上に、仏道を習ひて、すでに戒を保てり。そらごとの罪を恐るるゆゑに、このことを聞こえつるなり。その声を習ひ知りて後、この国にてゆめゆめ人に聞かせたまふな。かの手を伝へたまはむほど、心より外に乱るるところまぜたまふな。我この世に命を受けたること八十年、いくばくの月日にあらぬ上に、我が国大きに乱るべきによりて、またあひ見むことかたし。こよひの対面を契りとして、後の世にかならずあひ見ることあらむとす。またこのことを忘れたまふな」と言ひて、樓の上に帰りて、この弾きつる琴を取りて授く。「これを持ちて、かの商山を尋ねたまへ。その音を伝へて後に、我が国にてその声をたてたまふことなかれ」と、返す返す契りて、明け行くほどに別れぬれば、すずろにもの悲しくて、帰る道すがら、ながめをのみぞする。

暮れもはてぬに急ぎ出でて開きしかたに尋ね行く。いみじき馬をいとどうち早めつつ夜中にもなりぬらむと見ゆるほどに、回

じごと高き楼の上に、琴の声聞こゆ。はるかに尋ね登れば、道いと遠し。これは鏡のごと光を並べ、いらかを連ねて造れるものから、屋敷少なく、かりそめなる屋に人住むべしと見ゆれど、わざと木陰に隠れつつ、楼を尋ね登れば、言ひしに^②変らず、えも言はずめでたき玉の女、ただひとり琴を弾きあたり。乱るる心あるなどはさばかり言ひしかど、うち見るより、ものおほえず、そこら見つる舞姫の花の顔も、ただ土のごとくになりぬ。古里にていみじと思ひし神奈備の皇女も、見あはするに、鄙び乱れたまへりけり。あまりことごとしくも見ゆべきかんざし、髪上げたまへる顔つき、さらにけ遠からず。あてになつかしう、きよくらうたげなること、ただ秋の月のくまなき空に澄みのほりたる心地ぞするに、いみじき心まどひをおさへて、念じ返しつつ、かの琴を聞けば、よろづのもの音ひとつに合ひて、空に響き通へること、げにありしに多くまさりたり。

とかくのたまふこともなけれど、ただ夢路にまどふ心地ながら、この得し琴を取りて掻き立つるを見て、もとの調べを弾きかへて、はじめより人の習ふべき手をとどこほるところなく、ひとわたり弾きたまふを聞くまに、やがてたどらずこの音につけて掻き合はすれば、我が心も澄みまさるからに、すずろに深きところ添ひて、やがて同じ声に音の出づれば、手に任せてもろとも弾くに、たどるところなく弾き取りつ。これも月の明け行けば、琴をおしやりて、帰らむとしたまふ時に、悲しきことものに似ず、おほえぬ涙こぼれ落ちて、言ひ知らぬ心地するに、公主もいたうものをおほし乱れたるさまにて、月の顔をつくづくとながめたまへるかたはらめ、似るものなく見ゆ。例の、文作り交して別れなむとする時、「この残りの手は九月十三夜より五夜になむ尽くすべき」とのたまふ。

雲に吹く風も及ばぬ波路より問ひ来む人はそらに知りなき……A
とのたまふ。

〔松浦宮物語〕より

問1 傍線⑦の「つかさをたてまつり」、⑧の「ながめをのみぞする」を、それぞれ現代語訳せよ。

問2 傍線①の「り」、②の「なり」、③の「べき」、④の「ぬ」、⑤の「つ」の意味として、最も適當と思われるものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 断定
- 2 完了
- 3 推量
- 4 存続
- 5 婉曲
- 6 意志
- 7 打消

問3 傍線④に「返す返す契りて」とあるが、その具体的内容について、冒頭からの翁の会話も含めて、合致するものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 公主の命は長くないので急いで商山に向かい琴を習うべきこと
- 2 公主から秘曲を伝授されるためには唐の朝廷を訪れるべきこと
- 3 公主から秘曲を伝授されても決して唐で聞かせてはならぬこと
- 4 琴の伝授をされたからには日本への帰国を願ってはならぬこと
- 5 唐には近く内乱が起こるので来世での再会は期待できないこと
- 6 公主から秘曲を伝授される時は恋心を起こすべきではないこと

問4 傍線⑤の「言ひ」、⑥の「思ひ」、⑦の「見」、⑧の「掻き合はすれ」の主体は誰か。最も適當と思われるものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 翁
- 2 公主
- 3 氏忠
- 4 唐帝
- 5 神奈備の皇女

問5 傍線⑨の「念じ返しつ」の説明として、最も適當と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 公主への恋慕の思いを口に出したいと強く思うこと
- 2 神奈備の皇女の昔の面影を心にはっきりと描くこと
- 3 翁の忠告を思い出して強く自制する気持をもつこと
- 4 異国での動乱の気配がひしひしと伝わってくること
- 5 公主の琴の技が上達することを幾度も祈念すること

問6 Aの和歌からどのようなことがわかるか。最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 氏忠が帰国することに絶望したこと
- 2 公主が二人の出会いを予感したこと
- 3 公主が翁の予言の内容を信じたこと
- 4 公主が氏忠の才能を妬んでいたこと
- 5 氏忠が公主との別れを哀惜したこと

問7 Aの和歌に用いられている修辭法は何か。次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 序詞
- 2 季語
- 3 対句
- 4 倒置
- 5 縁語
- 6 枕詞

問8 本文の内容に合うものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 翁は、琴の技により唐帝から手厚くもてなされていたが、公主にその地位を譲った。
- 2 氏忠は、翁に教えられた通り、すぐ商山に向いて美しい公主に会うことができた。
- 3 翁は、俗世間を離れて久しいので、現実とまったくかけ離れたことを氏忠に告げた。
- 4 翁は、異国人への秘曲伝授は禁じられているが、氏忠には公主に会うことを勧めた。
- 5 氏忠は、早く日本に帰りたいと翁に告げたが、公主を見たときに気持が変わった。
- 6 氏忠は、翁が元は日本人であることを察知したので、翁の言葉を信じようと思った。

四 次の文章を読んで、問いに答えよ（設問の都合上、訓点を省略した部分がある）。

孔子自^リ衛反^レ魯、息^ニ駕^ヲ乎河梁^ニ而觀^ル焉。有^ニ懸水三十仞、
圓^ク流九十里。魚鼈弗^レ能^ハ游、黿鼉弗^レ能^ハ居。有^ニ一丈夫、方^ニ
將^レ厲^ニ之^ヲ。孔子使^メ人止^メ之^ヲ曰^{ハク}、「此懸水三十仞、圓流九十
里。魚鼈弗^レ能^ハ游、黿鼉弗^レ能^ハ居也。意者難^ク可^ク以^テ濟^ニ乎。」文
夫^①不^レ以措意、遂^ニ度^ニ而出^ク。孔子問^レ之^ニ曰^{ハク}、「巧乎。有^ニ道術乎。
所^ニ以^テ能^ク入^リ而^テ出^ル者、何^ゾ也。」丈夫對^{ヘテ}曰^{ハク}、「始^メ吾之入^ル也、先^ニ
忠信^ヲ及^ニ吾之出^ル也、又從^{フニ}以^テ忠信。忠信措^{キテ}吾軀^ヲ於波流^ニ
而吾不^レ敢^{ヘテ}用^ヒ私。所^ニ以^テ能^ク入^リ而復^ク出^ル者、以^レ此也。」孔子謂^{ヒテ}
弟子^ニ曰^{ハク}、「二三子識^シ之^ヲ。」水且猶可^ク以^テ忠信誠身親^レ之、而

⑤
況 人乎。

(一列子)

注 衛・魯春秋時代の国名。

河梁 河に架かる橋。

懸水 滝。

切 長さの単位。一メートル余り。

圓流 渦巻く流れ。

鼈・鼈 どちらもすっぽんの類。

遷 二の一種。 丈夫 男。

道術 仙術。方術。

問 1 傍線①の「不以措意」の意味として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 孔子から言われたことが気になっている
- 2 孔子から言われたことの意味が分からない
- 3 孔子から言われたことを全く気にかけない
- 4 孔子から言われたことをよく理解している
- 5 孔子から言われたことに疑問を持たない
- 6 孔子から言われたことを試そうと思っていない

問 2 傍線②の「所以」、⑤の「況」の読み方を、送りがなも含めて、それぞれひらがなで書け。

問 3 傍線③の「此」は何を指すのか。最も適当と思われることばを、本文中からそのまま抜き出して、漢字三字以内で書け。

問 4 傍線①の「水且猶可以忠信誠身親之」の書き下し文として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 水且に猶ほ忠信を以て身を誠にして之に親しむべきがごとし
- 2 水且に猶ほ忠信を以て誠身して之を親とすべきがごとし
- 3 水すら且つ猶ほ忠信を以て誠身して之を親とすべし
- 4 水すら且つ猶ほ忠信を以て身を誠にして之に親しむべし
- 5 水且つ猶ほ忠信誠身を以て之を親とすべきがごとし
- 6 水且つ猶ほ忠信を以て身を誠にして之に親しむべきがごとし